

しだれつゝこの世の花と咲きにけり

藤田湘子

一読、しだれ桜の美しい景がひろがる。遠目にうかぶ一本桜。花びらに近づくとかすかな匂い。大きな枝垂れの樹下に潜りこんだ時の、包まれるような夢見心地。

湘子の心に棲む名木は、秩父円通寺のしだれ桜。その盛りを見せようと地元の句友が、毎日米粒を撒いて、花が雀に食われるのを守ってくれたという。そんな交歓を感じさせる「この世の花」であるが、「この世」とくれば、どうしてもかの世を想起してしまう。思い出すのは浄瑠璃寺への吟行。その境内は浄土の世界感を現している。此岸とされる東の塔の上から、極楽浄土とされる池の向こうの「九品仏」を、遠く眺める湘子先生の横顔を傍で見た。今でもくつきりと思いい出す静けさである。